

中嶋嶺雄先生と私の研究の原点

渡邊 啓貴

中嶋嶺雄先生の訃報に接したのは海外出張の帰国の途次であった。帰国便での私は眠ることもできず、帰国後はぼっかりと心に穴が空いたまま、疲れ果ててしまうまでの何日かを過ごした。私は結局研究者を志すことになったが、ささやかなわたしの人生の折節に先生の姿があった。

わたしが東外大に入学後最初の夏休みに、先生の処女作の『現代中国論』を読んだときの読後感には衝撃的であった。中国研究そのものはわたしの専攻語とは直接関係がなかったし、その本の背景にある当時の日本人知識人のイデオロギー論争はわたしの知的関心領域以上のものではなかったが、毛沢東という人物の描写の仕方にわたしは大いに心を打たれた。わたしが齧ってきたマルクス・レーニンの著作もいろんな箇所で見かけていたが、それは筆者の主張を正当化するための小道具にしか過ぎないように見えた。わたしはこの著者の物の見方に大いに啓発されたのである。人の考え方や行動にあまり心酔することのないわたしの性格からしてそれは自分でも心地よい喜びであった。先生とは比較にはならないが、多少のイデオロギー的彷徨を経験したものにとっては共感するところも多かった。

結局私自身は研究者の道を歩むことになったが、中嶋先生の影響を自分が強く受けていることを改めて確認したのは、最初に出版した作品の最終校正をしていたときであった。その本は1981年にフランスの大統領に就任したミッテランの人となり、その内外政策と政治手法を論じたものであった。ミッテランという人物はわが国ではまだ誤解している人が多いが、決して社会主義の硬骨漢でもなければド・ゴールのようにアメリカに抗してまで自分の世界ビジョンを貫こうとした人物でもなかった。1970年代初めに新生フランス社会党第一書記（党代表）となったが、マルクス主義であ

れ、組合主義であれ、彼が社会主義運動に身を寄せたことはなかった。中道派の人物であったし、アルジェリア独立には断固として反対した人物であった。外交面でも就任当初前任者ジスカール・デスタン大統領以上に親米的な方針を表明した。

わたしが描こうとしたのはよりリアルなミッテラン像であり、フランス社会を理想化してみようとする立場の意見が多かった当時の日本の知的状況に対するアンチテーゼであった。我知らず、わたしはそうした眼でフランス政治を分析していたのである。

十億の人間が生死の淵を彷徨った文化革命の時代から月日が流れ、すでに国際政治は冷戦末期のドラマ性を失いかけた80年代であるから、中嶋の二人の指導者には共通点は少ない。しかし無意識のうちに、わたしのフランス大統領の分析は、中嶋先生の文化革命批判と毛沢東分析と重なっていた。私が執着した点は権力闘争の翳に秘められた人間の真実に対する見方であった。

そのことを学んだのは中嶋先生の最初の著作からであり、私の研究の原点にそれはしっかりと根付いていた。

中嶋先生のご業績は周知のように多岐にわたる。地域研究を学際的な新たな学問領域として東京外国語大学の新機軸にされようとしたこともその先見性の表れであった。新しい大学作り、英語教育への積極的な発言などたくさんの人生を先生は生きられた。

先生が亡くなられて、そうしたさまざまな思い出の中で、改めてわたしの原点を思い起こす日々である。

(わたなべ ひろたか・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)